障害のあるなしや年齢に関係なく、思いのまま表現する芸術「ボーダーレスアート」。ボーダーレスは「境目や違いがない」という意味で、テーマや作り方、使う材料に決まりはありません。そんなボーダーレスアートが作られる現場の一つ、札幌市豊平区の「アトリエ　ペン具」を、札幌のこども記者2人が取材しました。　（町田誠）

障害、世代超えて アートに没頭

こども記者見ぶん録

札幌・アトリエ ペン具

2人は手稲西小5年の淀野柚希さんと、東園小6年の若松咲菜さん。アトリエを運営する卜部奈穂子さん(52)が案内してくれました。

この場所で卜部さんは普段、成長に助けが必要な小中高生を支える児童デイサービスを行っていて、子どもたちは絵や工作などを制作。会話が苦手な子も作品を完成させると達成感が得られ、自信がつくといいます。

卜部さんは「ボーダーレスアートは『こう表現したい』という思いが大事。作品には作者のこだわりが強く出ます」と言います。大好きなラーメンを人のように描く小学生もいるそうです。

卜部さん(右)から完成したての絵を見せてもらう淀野柚希さん(左)と若松咲菜さん。何に見えたかな…？（いずれも西野正史撮影）

好きな物 思いのまま創作

デイサービスの卒業生が毎週土曜の午前にアートを作っており、この日は6人が集まりました。1人ずつ机に向かい、好きな絵の具や筆を選んで心の中のイメージを形にしていきます。

「スライム」作りにも挑戦。「パンやチーズみたい！」と言いながら、手でこねたり伸ばしたりしました

生み出される作品は色づかいが独特だったり、たくさんの線が重なり合っていたり、こども記者が今まで見たことがないようなものばかり。

アーティストのmusouさん（左）に取材する、こども記者たち

卜部さん（左）から、いろいろな作品を見せてもらいました

卜部さんはアーティストが描いたばかりの絵を手に「何に見える？」とこども記者に質問。2人は「キツネ」と答えましたが、実はネコでした。「答えが一つではないのが創作の良いところ。作者の描きたい気持ちも、見た人の考えも両方大事です」と卜部さん。

2人はアーティストのmusouさん(29)にインタビューしました。旅で見た風景を物語のように描いています。若松さんが「絵が完成したらうれしいですか？」と聞くと、ムソウさんは「楽しいです！」。淀野さんが好きな色をたずねたら「金と銀です！」と答えてくれました。

その後2人は好きな画材で自由に絵を描きました。プロ用の高級ペンもあり「かきやすい！」とびっくり。若松さんは大好きなカメの絵を、淀野さんは太陽と星と空の絵を完成させました。

スライム作りにも挑戦。卜部さんから「コンタクトレンズの洗浄液を入れると固まりやすいよ」と助言され、淀野さんはうすくて大きなスライムをこしらえました。スライムを作り終わった若松さんは得意の折り紙でインコを作り、つめの形にこだわりました。

取材の後、若松さんは「好きという気持ちをそのまま出して描くのが大事、という言葉が印象に残った。筆を使い分けながら好きな物の絵を描くのは面白かった」。淀野さんは「作る人の思いが強いと良い作品になると感じた。みんなと違う作品でも、自由に作っていいんだと分かった」と話していました。

◇

まなぶんデジタルには、さらに多くの写真があります。5月15日夕方から見られます。